

「思いもよらぬ応答を前に」

ダニエル書 10 : 12

November.22.2020

ダニエル 10 : 12

Preface

クリスチャンになって最も大きく変えられることは、祈りを知らない者から祈りを知る者へと変えられることです。

祈りを知っただけではありません。

クリスチャンとなって、祈らない者から、祈る者へと変えられます。

もちろん、クリスチャンになる以前も、人は祈ります。

人は肉なる存在ではなく、霊なる存在であるがために、“祈るという本能”が生まれながらに備わっています。

祈る対象や祈る内容がどうであれ、祈るという行為は、誰が教えるでもなく、祈ります。

ただし、人は生まれながらにして神の御怒りを受けるべき罪人として生まれてきますので、その祈る対象や祈る内容は、主イエス様が出会ってくださらない限り、方向音痴なものではありますが、祈りはします。

私もクリスチャンになる前、幼い頃から祈っていました。

例えば、小学生の時、小学校の行事で、毎年七夕になりますと、短冊に願い事を書いて、祈るような気持ちで笹に吊るしてしていました。

歌手になれるようにとか、お金持ちになれるようにとか、カウンタックを買えますようにとか（タイヤ一本50万円）を書いて、祈るような気持ちで吊るしてしていました。

忘れることが出来ないのが、小学3年生の時の七夕です。

家でこっそり書いた短冊を学校に持って行って、教室にあった笹に吊るしたのですが、その内容が「女にもてますように。」というものでした。

それが担任の先生にバレて、なぜか保健室に呼ばれ、正座させられて、先生からダブルピンタなるものを食らいながら、泣きじゃくった思い出があります。

「女にもてますように。」は、幼い頃からうちの奥さんに出会うまで、ずっと私の切実な祈りでした。

それ以外にも、正月三が日には40万人以上の方が参拝に訪れる西新井大師が家のすぐ近くにありましたので、当然のように、小学生の頃から毎年三が日に

は参拝し、性懲りもなく、また「女にもてますように。」とか、「早稲田実業中学、立教中学、成城中学のどれかに受かりますように。」とか、切羽詰まるような思いで祈ったりしていました。(受験は全部落ちましたが…)

それ以外にも、友達と西新井大師の境内にある水洗い地蔵をたわしで願掛けするような気持ちで洗いながら遊んだり、小学校の写生会では、西新井大師境内にある三重塔みたいなものを描いたり、西新井大師の境内に隣接する大師前駅という駅を使って、小学生の頃は塾、中学1年から高校3年生までは毎日通学していて、ある意味、西新井大師は生活の一部でしたが、

別に大師に行かなくても、祈りの対象と祈りの内容はどうであれ、日々の生活の中で、何気なく願掛けのような祈りを、何かに向かってしていたように思います。

今思いますと、方向音痴で見間違いな祈りではありましたが、そんな願掛けのような祈りを通してでさえも、小さい頃から、

人間は、人間とのやり取りだけで完結する肉なる存在ではなく、人間という領域を遥かに超える何か偉大な方によって成り立つ霊なる存在なんだということを、無自覚のうちに知っていたと言いましょか、感じていたんだと思います。

Part One

そしてついに、大学3年生の頃クリスチャンになって、そこで初めて、「祈る」ということをはっきり知り、「祈る対象」がどなたなのかもはっきり知り、「祈れる」ということが嬉しくてたまりませんでした。

主イエス様の救いに与り、その救いを感謝しながらの祈りは、カピカピに渴いて地割れした土地に優しい雨が降り、潤い、水が流れ出るかのようなさわやかな思いがしました。

それまで祈っていた願掛けのような、空を打つような祈りではなく、投げたボールがしっかりと的に当たり、しかも返ってくるような感じを受けました。

それまで、人との会話だけでは堂々巡りのようで、渴きと空しさがいつも付きまとっていました。

また、方向も内容も定まらない願掛けのような祈りとは違って、キリストを信じてからの祈りには、平安と安心感が伴いました。

クリスチャンになる前は、「何はともあれ、自分の願いが叶うこと」が祈りだと思っていましたが、

クリスチャンになってからの祈りは、自分の願いが叶うことよりも、

祈る対象であられる主イエス様の、主なる神様の、御思い御旨がどこにあり、どのように選択し、進み、待つことがその御旨に適うことなのかという、祈る対

象であられる主なる神様の思いを知りたいという会話のような要素が強いということ、祈っていくうちに、また聖書の言葉から少しずつ教えられていきました。

もちろん、私の願いを神様に訴えることも祈りのうちに含まれますが、それは祈りの一要素であって、祈りの目的ではないということを経験として知っていくようになります。

私たちが祈った時、祈ったけれども、祈ったように事が進まない、いや、事が進まないだけならば、まだましかもしれません。

事が進まないどころか、状況が悪化して、逆方向に進んでいるかのようにさえ思えてしまうことがあります。

そんなとき、どうします？

「そりゃないよなあ！」と言いながら信仰から離れていくことも出来ますが、その代わりに、「神さま、そりゃないっすよ！」と、拳を突き上げながらも、呻き、わめくようにでも、また祈って、「一体全体、ここにどんな意味があり、何の意図が御有りなのですか？」と、さらに祈ることも出来ます。

Part Two

先ほど読みましたダニエル書 10 : 12 のダニエルが、まさにそうでした。

祈りの人ダニエル、日に三度ひざまずき、神の前に祈って感謝をささげていたそのダニエルが、一世一代の、70年もの間、待ちに待ったイスラエルへの帰還事業のために、祈らなかったわけがありません。

帰りたくても使命ゆえに帰れない帰らないダニエルが、祖国イスラエル故郷エルサレムに帰還していった5万人の同胞の民のために祈らなかったわけがありません。

いつもに増して、祈り、主の霊に促されて祈ったでしょう。

帰還の民たちの健康、生活、信仰、財政、人間関係、神殿再建作業の安全、その他諸々思いつくことすべて主なる神様に祈ったことでしょう。

しかし、伝え聞く知らせは、全くもって期待に反することでした。

思わぬ巧妙で強力な妨害が入り、復興作業が上手く進まず、滞り、疲弊し、意欲を失い、気力が失せ、信仰さえも萎えてしまっている状況にあることを知りません。

祈った祈りとは、全くもって真逆の状況が広がっていました。

皆さん、どうしますか？祈った祈りとは全く違った状況が展開しましたら？

諦めますか？ 祈ることを辞めますか？ それとも祈り通しますか？

さらには、ただ祈り通すのではなく、そこに何の意図があり、どんな御思いがあるのですかと、神の御言葉を待ちますか？

願っている通り事が運ばないわけですから、憤りが沸き上がってくるのは、まあ致し方ないと思います。

ただここで、その憤りをもって取れる態度姿勢が二通りに分かれるかもしれません。

「ああ、やっぱり、神なんかいないんだ。もし居たとしても、人の願いなんか無下にするつれない奴なんだ…」と思って背を向けるか、

「何なんですか！？ 主よ！」と憤りながらも、「それでも神様、祈らずにははいられません。それでも、あなたの御旨が成されていることを信じずにははいられません。あなたの御旨が成されていることを信じますから、どうか、私にその御旨を教え、御言葉をお与えください。」と、すがるように祈るかのどちらかになるでしょう。

私だったら、「ふざけないでください！ 何なんだよ！ もういいよ！」と言いながらも、やむなくまた目をつぶって祈りなんだか、不満なんだかわからないような言葉を並べ立てるでしょう。

ほぼ毎週、こんな祈りをささげています。こんな祈りしか捧げられないことに申し訳なささと情けなさを覚えながらも、こんな祈りを辞められません。

なので、もしかしたら、ダニエルも、憤ったかも知れないと勝手に想像して、聖書を読んでみるのですが、憤った節が全く見られないんです。

憤っているどころか、心を決めて、今起こっている事に、神様の御旨とご計画を見出そうと、ひざまずきます。

そして、私のように、神に不平不満を並べ立て、反旗を翻したかのように拳を突き上げるのではなく、主の前に遜ります。

遜るというのは、自分で自分のことを蔑むということですが、人は罪人ですから、自分で自分のことを蔑むことなんかまず出来ません。

蔑むどころか、盛り立て、自慢し、相手よりも上になろうとします。

神の前にでさえ、私という人の正当性を主張して、上になろうとします。

でも、ダニエルは、幸いにも、本当に幸いにも、神の前にあって、自分をわきまえ、蔑み、遜り、その神の高く広く深い御旨を知り得ない自分のことを素直に認めます。

見掛け倒しの人前で装う謙遜ではなく、神の前に遜るんです。

「心の貧しいものは幸いです。天の御国はその人たちの者だからです。」と、

イエス様がおっしゃいましたが、ダニエルは自分の貧しさを神の前にあって、また人の前にあっても、認める、本当に幸いな人でした。

こんな幸いな人になりたくて仕方がありません。

自分の貧しさを素直に認めることの出来る幸いな人になりたくて仕方ありません。(皆さん、こんな幸いな人になりたくありませんか?)

Part Three

ダニエル10：12 (パワポ)

権力、財力、知恵、知識、人望、傍から見たら何も惜しいものなんかないように思えるダニエルが、無謀にしか見えない断食祈禱を始めて3週間目に、主イエス様に遣わされた天使ガブリエルが、ダニエルに告げます。

「あなたが断食祈禱を始めたその最初の最初から、もうすでに、あなたの祈りは聞かれている。

なぜならあなたは、目の前に起こっている理解し難い事件事故のような出来事を前にしても、神のご計画を信じて神の御旨を求め、また、奢り高ぶって神を卑下し背を向けるのではなく、自分を卑下して、神の前に出てくるその信仰を神様が良くご存じであられるから。」と、告げるのです。

ダニエルは、それまでの90年間の信仰生活の中で、期待にそぐわない危機を何度も体験しましたが、それと同時に、そこにある主のご計画を知ってきました。

日に三度ひざまずき、感謝を献げて祈っていても、権力者が見た夢ゆえに、自分を含めた国中の知者たちが皆殺しに会うという理不尽な危機を経験した時、それでも、天の神様に哀れみを乞う祈りを献げました。

また、日に三度ひざまずき、感謝を献げて祈っていても、同僚たちの嫉妬ゆえに、吠えたける獅子の穴の中に投げ込まれるという危機にも会いました。

それでも、獅子の穴に投げ込まれる前も、投げ込まれた後も変わらず祈りました。

ダニエルと同じように、日に三度ひざまずき、感謝を献げて祈っていただろうシャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの3人の信仰の友たちは、キリスト者であるという理由だけで、燃える炉の中に投げ込まれましたが、

「私たちの仕える神は火の燃える炉からでも私たちを救い出すことがお出来になり、たとえそうでなくても、私たちは偽の神々や富に仕えることはない」と祈りのうちに宣言しました。

そして、主の恵みを期待しました。

「どんなに理解し難い困難や苦しみや艱難があつたとしても、そこには必ず、私たち人間が到底推し量ることの出来ない神の御旨と神のご計画がある。

そして、私たちに来ることは、自分を蔑み、遜り、悟りを与えられ、御言葉を与えてくださることを信頼して祈ることだ。」と、主の恵みを求めました。

Part Four

1972年に殉教した中国の偉大な神学者であり、牧会者であるウォッチマン・ニーという方がいるのですが、彼が、激しい迫害の中、聖書教え、牧会していく中で、病にかかりました。

そして、聖書に書いてある癒しを信じて、「主イエス様、どうかこの病を取り除いてください。」と祈りました。

すると応答があつたのですが、その応答は、使徒パウロに与えられたのと全く同じです。「わたしの恵みはあなたに十分である。」という応答でした。

その応答が信じられず、理解も出来ず、また「神様、どうかこの病を癒し、取り除いてください。」と祈りました。

そんな時、寝ている時に一つの夢を見るんです。

中国最大の川揚子江を、船に乗って下っているのですが、目の前に、ものすごい大きな岩が現れました。

このままいくと、その岩に船がぶつかって沈没してしまうので、「神様、どうか、この岩を取り除けてください。」と、夢の中で祈りました。

でも、一向にその岩は取り除けられません。だから、また祈ります。「神様、どうか、この目の前の岩を取り除けてください。じゃないと、船がぶつかって沈没してしまいます。」

すると、その岩が取り除けられる気配はまるでないのですが、よく見ると、川の水かさが増して来ていて、その岩を覆い被すほどになっていて、船がその岩にぶつかりそうになるその瞬間、水が岩を完全に覆い被せて、船がその岩の上を無事通過することが出来ました。

その時、夢から覚めて、神様が与えてくださる悟りを得ました。

「私にとって、その岩のような障害物が無くなることが重要なのではなく、どんな岩でも十分に覆い被せてしまうほどの神の恵みが、私には必要なんだ！神の恵みが溢れるなら、岩のような障害物は何の問題にもならない！」という悟りを得るんです。

その時から、ウォッチマン・ニーは、何か問題が生じると、「その問題を無くしてください、取り除いてください。」と祈るのではなく、「神様、もっと恵みを注いでください。もっと大きな恵みをお与えください。」と祈るようになりました。

私たちも同じです。

もちろん、「問題を取り除いてください。失くしてください。」と祈ることも出来ずし、祈っていかなければなりません。

しかしそれ以上に、「目の前にある問題が問題に思えないほどの主の強力な恵みを注いでください。毎日、毎瞬間、神が共にいてくださっていることを覚えさせてください。あなたの覆い尽くすほどの恵みをお与えください。」と祈るんです。

そうすれば、恐れが去ります。

どこに恐れがありますか。神の恵みの前に、はばかることの出来る恐れなど、存在しません。

だから、天使ガブリエルがダニエルに、「恐れるな」と語り掛けるんです。

Conclusion

私たちは、確かにこれまで何度も、神の恵みを体験してきたはずですが、また予想に反する危機にいざ直面すると、経験したはずの恵みの記憶が、一瞬のうちに綺麗さっぱり飛んで行ってしまうかのような心境に陥ります。

ダニエルにとっても、この危機は、それほどの危機だったと思います
でも、それでも、やっぱり、ひざまずきます。
いや、ひざまずくように導かれます。

主は、私たちがひざまずかせるように導き、「心の貧しいものは幸いです。」という幸いと、神の深い御旨を教えてくださいます。

ダニエルは、遣わされたガブリエルの言葉によって、今一度、神のみこころを知り、今日の前に広がっている事体が、神の知らないところで起こっている事ではなく、神の御手の中で起こっていることだというのを知るんです。

神様は、帰還事業が滞るということを通して、ダニエルとイスラエルの民たちの信仰を増し加えてくださいました。

そして、自分たちの力による復興ではなく、祈りに応えてくださる100%神の助けと導きと恵みによって成されていく復興を、16年間という長い時間を要しましたが、その長く感じる時間さえも必要だったと告白できる復興を、この後、体験しました。

この危機が、彼らには必要だったのです。

彼らが望む奇跡は起こりませんでした。彼らに必要な奇跡を神様はよくご存じで、彼らに必要な奇跡をお与えくださいました。

今私たちに出来ることは、思いもよらぬ事体の前に、恐れ、震え、不安に陥り、神により頼む信仰から離れることなく、

思いもよらぬ事体の前に、心を定めて、悟りを得ようと、神の前に自らを戒め、圧倒的な主の恵みを求めて祈ることです。

私たちの期待する道や、期待する奇跡を遥かに超える主の道と、主の奇跡と、主の恵みを祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ダニエル 10：12